

シャルル・ノディエの幼・少年時代

——伝記的研究の矛盾を整理し可能な復元の限度を示す——

西尾 和子

作家の生涯が一切不明のままであつたとしても、その作家の残した作品の価値や美しさが損われないことは言うまでもない。作品は作家から独立して読者の前に存在している。

しかし同時に、作品がその作者と分かちがたく結ばれている事実にも異論をはさむ余地はない。

シャルル・ペロー (Charles Perrault) の流れを汲む御伽噺の作家として一応の評価を受け、そして忘れ去られていたシャルル・ノディエ (Charles Nodier) を文学史の重要な主役の一人にひきあげたカステクス (P.-G. Castex) も、ノディエの作品に対してそこに反映された作者自身の内面的

体験への共感を通して近づいているように見える。⁽¹⁾ この場合には、作家の人生に関する伝記的知識を得ることが、作品の隠れていた局面に目を向けさせる契機をなしていると言える。さらに一般的には、歴史的研究方法の一端を支え、主観的印象や感動の、事実の裏付けによる確実化を可能にしている⁽²⁾と広く考えることができる。それは文学研究の基本的な部分に欠くことのできない作業であると思われる。

ところでノディエの伝記的事実を知ろうとする時、今日手にすることができるのは「素早い語り口が魅力の伝記的研究 (biographie attachante au style alerte)」⁽³⁾ ユーベル・ジュアン (Hubert Juin) の「シャルル・ノディエ」⁽⁴⁾ を挙げ

ることができずにすぎない。また基本的な資料である書簡について言えば、公表されたものの過半数は、三十以上にものぼる雑誌や研究書に分散して掲載されていて、⁽⁵⁾それらに目を通すことはきわめて困難である。書簡集にまとめられているのは、彼の終生の友、ブザンソン (Besançon) 在住のヴェス⁽⁶⁾ (Charles Weiss) に宛てた手紙のうちの一二六通にすぎない。

手することはできなくとも、図書館に依頼してコピー等を送って貰うことは可能だが、それを含めてもノディエに関する伝記研究そのものがきわめてとぼしいと言わざるをえない。

カステックスが「物語集」⁽⁷⁾の巻末で「伝記研究 (étude biographique)」として紹介しているのは、ロジエ (H.-Rosier) の「シャルル・ノディエの生涯」⁽⁸⁾のみである。もっとも特に注記はないが同じ頁に掲げられているパンゴ (Léonce Pingaud) の「シャルル・ノディエの青春」⁽⁹⁾はノディエの前半生を知る上では前者をしるぐ研究であると思われる。

しかしながらノディエの作品に対する評論・研究の一部で、彼の伝記的事実に触れている例は注(一)に引用したカステックスの一文を始め、無数に見出すことができる。

これら、伝記的研究および、それを踏まえてなされていると思われる言及には、それぞれくい違っている部分や、単独では理解しがたく、同一と推量される事実を扱っている別の研究によって補足する必要がある場合が数多く見られる。

本小論では先に挙げた三つの伝記的研究とさらにブザンソンのアカデミー会員で法律家のビィエ (Maurice Billy) がまとめた小冊子「革命的司法官・シャルル・ノディエの父」⁽¹⁰⁾を、ジュアンが作成した年譜にそって検討し、曖昧にされてきたノディエの幼・少年時代に照明を当て、合意できる伝記的事実を探り、また研究相互間にくい違いがあれば、疑いの余地を余地として認め、独断と偏見を避けて、可能なノディエの姿を、整理し、確認してゆきたいと考えている。

出生をめぐる事情

シャルル・ノディエの出生証明書 (acte de naissance) がブザンソンのサン・ジャン・バチスト (Saint-Jean-Baptiste) 教会の登録簿 (registre)に残されていることから、彼

の出生の日付や、私生児として生まれた事実は、各研究家が一致して述べている。

“Jean-Charles Emmanuel, fils de Suzanne Paris
... et d'un père inconnu, est né... Il a été baptisé
le même jour...” (“J”, p. 15)

父不明と記録されるシャルルの洗礼には、母方の親族も出席していない(《P》八頁)。代父と代母の名は証明書によって知られる(《P》八頁・《J》一五頁)がさらに教会の登録簿を調べてビエはそれが、六ヶ月前、初聖体を拝領し、一七七六年八月十日に堅振の秘跡を受けたばかりの若い学生と、文字も書けない少女であったことを明らかにしている(《P》八頁)。

公的な記録はシャルルが父の無い子として生まれ、形ばかりの代父から名を貰って洗礼を受け、一七八〇年四月二十九日、この世にひっそりと生を営み始めたことを告げている。

母親・シュザンヌ・パリス(Suzanne Paris)

オラトリオ会(la congrégation de l'Oratoire)の講師から

法律家に転じ、ブザンソン市の有力者となっていた父の手によって、シャルルが英才教育をほどこされ、早熟な知性を発揮したことは多くの解説書が触れている事実であり、父と息子の親密な関係はよく知られている。

一方「シュザンヌ・パリスが息子作品の中に姿を見せないのは不思議なことだ」とジュアンは書いているが、伝記研究においてもシャルルの母シュザンヌがどのような女性であったかは、はっきりしていない。

ジュラ(Jura)のラ・グランジュ・ロンジャン(La Grange-Longin)の出身。「過激なジャコバン党員(Jacobine intransigente)」アントワヌ・メルキヨール(Antoine-Melchior)(ノディエの父)はヌーヴ街((rue Neuve)の彼の家でこの「粗野で生まれの卑しい激しい気性の(crude, d'origine humble, de sentiment tranché)」女と同棲し、二児をもうけた。(《N》三六頁)

アントワヌ・メルキヨールは二十歳も若いジュラ出身の女性と関係を結び息子をもうけた。(《J》一四頁)

唯一の総合的伝記研究とされる《V》にはこの間の事情が全く欠けている。一七九〇年から書き起こされている同

書では、"La situation anormale du ménage ne s'accorde plus avec les nouvelles dignités du président Nodier et sa position dans la ville"と、裁判長として市の重職に就いたアントワヌが内縁関係に不都合を感じて、正式に結婚したことが記されているにすぎない。

目に触れる伝記的記述では次のような一文もある。

「…………ノディエは、出生届では父なし子と書かれている。父親ができたのは女中をしていた母が父の籍に入れてもらえたとき、ノディエが十四、五歳のときのことである」⁽¹⁴⁾

研究書の中にもシュザンヌを「女中」だったとしているものもある。

"In 1778 Antoine engaged as housekeeper Suzanne Paris of Granges-Longin, commune of Grozon, near Poligny, a large, bustling girl with dark complexion in her early twenties. He soon found himself obliged to marry the pregnant girl. (...) the couple lived secretly as man and wife in Besançon and their two children, Charles (1780) and Elise (1784) were born out of wedlock."⁽¹⁵⁾

これらまちまちの記述の中から浮び上がってくるシャルルの母はひとつの像を結びにくい。

貧しい少女。

教養のない少女。

ジャコバン主義者。

大柄で騒々しい娘。

アントワヌの家で同棲。

アントワヌの家の女中。家を出て同棲。

※P※はシュザンヌ・パリスの身元を、ずっと詳しく洗い出している(七・八頁)。

四十歳に間近いアントワヌは、彼より十九歳若い娘と識り合った。ポリニイ(Poligny)管区のグロゾン(Grozon)の出身でアナトワル・パリスとマリ・ルティの一人娘であった。両親は七人の息子と、彼らの所有する土地を耕していたが、シュザンヌは親元を離れブザンソンに出て暮らしていた。「おやぶへロンド・サン・カンタン街(rue du Rondot-Saint-Quentin)に商店を営んでいた伯父ドニ・パリス・ロデのもとに身を寄せたのだろう」(※P※七頁)とビエは推測している。この伯父の家の所在地はブザンソン市人頭税台帳(Les registres de capitation de la Ville de Besançon)

によって確認されている。ヴィクトル・ユーゴー広場 (Place Victor-Hugo) の設置によって建物はとり壊されたという。

ビィエは、産婆アンヌ・マリ・マンセルの立会いで、この Rond・サン・カンタンの家でシャルルが誕生したと報告している。

ドニ・パリス・ロデは一七八六年までこの家に住むが、身二つとなったシュザンヌは、伯父の家を出てサント・マドレーヌ教区 (paroisse de Sainte-Madeleine) に移り住み、一七八四年七月十二日、シャルルの妹ジャンヌ・クロード (Jeanne Claude) 通称エリーズ (Elise) を出産する (《P》、七頁〜九頁)。

シャルルの両親の正式な結婚がサン・マルスラン教会 (l'église Saint-Marcellin) で行われ、一七九一年九月十二日を期して、アントワヌとシャルルが正式に父子の関係を認められたことは全ての伝記研究が一致して述べている。

ブザンソン市の事情に明かいビィエ⁽¹⁶⁾の調査に信頼を置くならば、《N》がシャルルをヌーヴ街のノディエ家の屋敷で生まれたとしているのは誤っていることになる。おそらく正式にノディエの息子になるまでは、この家に住むこ

ともなかったと考えられるのである。

父子関係が認められた後にも、この一家がヌーヴ街の今日も保存されている家に住んだと断定できる決定的な手がかりは残されていないとしながらも、ビィエは、後年のノディエの作品中の一場面が、この屋敷の一階から見た泉水のたたずまいを写していると思われるところから、正式な結婚の後には、一家はこの家に住んだのであらうと推定している。

シュザンヌを女中と断じている伝記研究は、オリヴァー (Richard Oliver) の一例のみであるが、婚姻に際して証明書 (acte)⁽¹⁹⁾ に添えた新妻の署名が、「殆ど文盲に近い人が書いたようなひどい金釘流 (très gauche, presque d'illettrée)」 (《P》九頁) であるとビィエも注記しているほど無教育の女性であったことを考え合わせれば、彼女が女中であったということも想像しうることである。

《V》には正式な結婚以前のシュザンヌが次のように紹介されている。

“Suzanne Paris, grande, forte, les traits durs, porte sans élégance le costume des femmes du tiers, le fichu croisé sur la poitrine et la coiffe à

havolet. C'est elle qui, chez l'avocat, s'occupe aux soins du ménage." ("V", p. 14)

この一節があるいは「女中」説をみちびいたのではないかと推察されるが、内縁関係とは言え二児の母であるシュザンヌが主婦として家事をとりしきっていたことをこの一文は告げているにすぎないであろう。同書には、そのうえ正式結婚以前に、アントワヌが重職に就いたためにドゥニーズ (Denise) という女中を雇ったことが述べられているのである(《V》二〇頁)。もっとも先に述べたように、この時期にシャルルの一家はヌーヴ街には住んでいなかったと考えられるので《V》のこの部分も全面的に正しいとは言えない。

しかし一七九〇年にドゥニーズを雇ったという記述が正しいとすれば、この頃に正式結婚の合意があって、九一年を待たずにシャルルの一家は祖母の住むヌーヴ街の父の家に移って来ていたと考えるのが妥当のように思われる。

両親の結婚が正式なものとなったのは、シャルルが十一歳の時であるが、それ以前の彼の立場を伝えてジュアンは次のように書いている。

「シャルルが『ノディエの息子』だということは皆

がよく識っている。それでも、マチュー先生の学校に通う子供達は、おかまいなしにシャルルの母を馬鹿にした。公然と物笑いの種にされたのは、アントワヌではなくシュザンヌであり、シャルルを嘲る連中も、彼を通して、彼の背後の母親を嘲っているのである。自尊心は傷つけられた。

On sait bien que Charles est le "fils Nodier", mais cela n'empêche nullement les enfants qui fréquentent avec lui l'institution Mathieu de se moquer de sa mère. L'objet de la risée publique, ce n'est pas Antoine, c'est Suzanne. Ceux qui se moquent de Charles se moquent, à travers lui, de sa mère: orgueil bafoué!」(《N》三七頁)

しかし《V》も《J》もこのようなシャルル少年の屈辱感を記していない。

それどころか、《J》によれば、アントワヌの妹エリザベト (Elisabeth) (1747) も私生児を生み、出産後間もなく結婚によって正當な子とな²⁰ら²⁰している。風紀の乱れは著しかった、とパンゴは書き添えている(《J》一五頁)。

これが事実とすれば、ノディエの幼年期には父のない子

は、それほどのスキャンダルではなかったのかも知れない。

いずれにしても△V△が、小説風な描写で伝えているのは（シャルル一家の住居が誤まって記されていると思われる点は問題外として）両親の愛情に育まれて不自由なく暮らす、聰明な少年の姿である。

両親の内縁関係にジュアンの描くような屈折した思いを抱き傷つくことがあるとすれば、それは後になってからではないだろうか。一八〇〇年の政治論争の過程で現われた、シャルルを個人的に誹謗する匿名のパンフレットが、この彼の屈辱感を誘発した直接の動機だったと見るべきもののように考えられる。その遠因としては、革命勢力の興亡の結果がもたらした父アントワヌの権力の座からの失墜が挙げられるであろうし、またシャルルの体験を振り返ってみれば、彼自身の自分の過去の在り方に対する疑問もあったと推察されるのである。

こうした見方を裏付けるように、書簡集の冒頭に掲載されている手紙には、妹とともに母を氣遣う氣持が次のようにつづられている。

「お袋と妹は元氣にしているだろうか。平穩でいる

だろうか。君はあの二人が、ひどい目に遭わずに庇護されていると思うかい。もし辛い思いをしているのなら、僕は家に帰るつもりだ。

Ma mère, ma sœur se portent-elles bien? sont-elles tranquilles? les crois-tu à l'abri des persécutions? Si elles souffrent, je retournerai.⁽²⁷⁾

一七九六年から一八四四年にわたる手紙を「年代順に (par ordre chronologique)」集めた「明記される書簡集の第一番目にこの日付のない手紙が置かれているということ」は、編者エスティニャールによって、それが一七九六年に書かれたものである、と推定されたためと考えていい。

日付も発信地も書かれてはいないが、内容からみて△V△の五〇～五八頁に詳述されているように、年上の女ジュリエット (Juliette) を愛し、裏切られ、恋の苦しみと阿片の濫用とでむしばまれた心身を療すために、暫く、身を寄せた乳母の実家ジロマニー (Gironmagny) で、この手紙が書かれていることは明白である。

ジロマニー滞在は△N△の年譜で一七九八年の出来事となっている。一七九六年は、エコール・サントラル (Ecole Centrale) へ入学した当年であることから、ジロマニー滞在

をその同じ年とするのは無理があり、 $\Delta N \nabla$ の記載が正確であると思われる。とすれば当然エスティニヤールの日付推定は誤っているわけで、書簡集の中表紙の“1796-1844”という文字は“1798-1844”⁽²³⁾と訂正されるか注記を付される必要があると言える。いずれにしても、エスティニヤールのこの手紙の日付決定は伝記研究の成果と矛盾していることが指摘できる。

とは言え、この手紙が一八〇〇年以前に書かれている点は変りなく、妹と母への強い愛情の感じられる一文であり、それが当人達へ宛てたものでなく、友人ヴェスに向って書かれたものであることは、シャルルが母を恥辱とは思っていないかた⁽²⁴⁾と考えるひとつの裏付けととして差しつかえないと言える。

アラ (Larat) が公表したアミアン (Amiens) 発信の母宛ての一八一〇年四月七日付けの手紙には、もう前記のヴェス宛ての手紙に見られるような情感は通っていない。
“Bonjour, ma chère maman” と書き起し、それ “Je t'en-brasse” と結ばれているのは、特に愛情が込められていると見るよりは、単なる肉身への挨拶と考えるべきだろう。内容は自身の経済的窮状を述べ送金できないことを弁解す

る伏線とし、前金がうまく手に入ったらその一部はお母さんの取り分だ、と期待を持たせて、相手の非難を事前に避け、手紙の末尾では「現状の重荷を軽減するために充分努力をしていないとしても、私が無関心だと、責めないで欲しいのです」と言い、さらに母親が思い込んでいる程、自分の立場も恵まれてはいないことを暗に知らせ、母が買いかぶっていてくれるので、それに応えるためにのみ自身の改善を切望しているのだということを覚えていて下さい、と皮肉にもとれる口調で結んでいる⁽²⁵⁾。

実際、アントワヌの死後十八年間生き永らえたノディエ未亡人とシャルルとの後年の関係はかなり冷やかなものであったと思われる。先に述べた手紙も暗示的であるが、さらに、アントワヌの死に際しては、新妻を伴ってブザンソンに帰り最期を見とったシャルルが、母の死に際しては、それが突然のものではなかったにもかかわらず、彼女の傍に居なかったという事実⁽²⁶⁾は両者の関係を一層明白に語っている。しかし、それが肉親としての礼を失するほどの憎悪に貫かれたものであったと考えるのは間違っている。ジュアンの年譜も父の死は記しているにもかかわらず、母の死は無視している、といった一例からも分るように、伝

記研究の不備がそのままシャルル自身の母に対する無関心ひいては憎悪に結びつけて考えられてしまうような一面が無いとは言えない。

△P△は次のような事実を報告している(四五〜四六頁)。

すなわち、アントワヌは遺言によって妻に動産の三分の一を残したが、一族の所有の家屋に対しては何の権利も残さなかった。ただ彼女には、彼女が実家から貰い受け、結婚に際して売却した土地の売却代金が終身年金の形で三九五フラン六サンチームずつ入って来た。

シャルルの妹エリーズは一八二二年十月二十一日に公証人を通して家を売却するが、兄妹はその代金を受けとることはせず、未亡人に終身年金として支払われるよう買い主と取りきめている。未亡人は家を空け渡すことが必要となり、⁽²⁵⁾ブザンソン市中を転々と移り住むこととなる。

このことは、前記一八一〇年の母宛の手紙の内容とともに、シャルルが母親への愛を既に失なっていたとは言え、未亡人となった母への経済的配慮を忘れてはいないことを教えている。

以上の手がかりが明示しているのは、二十歳以前の青少

年期にシャルルは母をむしろ愛していたこと、しかし一八一〇年には愛情と呼べる感情を抱いてはいないこと、さらに一八二六年七月二十一日に死を迎えた老母にはもはや特別の関心を示さなかったことなど、僅かな事実には過ぎないが、それでも、ジュアンの記しているような「定説」をもう一度検討してみる根拠とはなり得るだろう。

一八〇〇年に起こった政治的論争の結果は表面的には渦中にあったシャルルの母親観を変えていると言えるかも知れない。

この時ジャコバン派(Jacobins)と、元ジャコバン派の少年党員であり、かつての革命裁判所の長官を父に持ちながら、今は反ジャコバンの中心人物であるシャルルとその一派の間には、政治的論争が持ち上がっており、それが個人誹謗を投げ合うまでに泥沼化していた。幾度か激しい応報がパンフレットによってなされた後、シャルルを中傷する決定的なパンフレットが出まわることとなる。その中で、両親の結婚が正当なものではなく、私生児として生まれた出生の秘密が暴かれ、愚弄される⁽²⁶⁾。

このパンフレットの後、シャルルは沈黙してしまう。そして書き始めていた小説「私自身(Moi-même)」に自分の⁽²⁷⁾

方から出生の事情を冗談めかしてさらけ出し、両親を嗤う、冷笑的、瀆聖的な一章を付け加えた、とロジエは説明している。

ところで「領主の名付け娘 (La filleure du seigneur)」と題する初期の短編作品で、その中に描かれる、名付け親である領主を思慕し、理解されることなく、領主の婚礼の日、はかなく死んでしまう貧しく美しい主人公の少女は、シャルルの母と同名のシュザンヌ (Suzanne) と名付けられている。

不可能な愛と女主人公の死は、シャルル・ノディエがこの後も繰り返し書きつづける主題であり、特に、恋をする少女の死は初期の作品群の殆ど全てに共通してあらわれている主題である。すなわち前記の小品に登場する少女は、主人公としての類型のうちに収まる普遍的な特徴を保持しており、美しく、共感を込めて描かれているのである。シャルルがもし、その正当化されぬ結婚の故に母の存在を恥じていたとすれば、このような同情心をそそる薄幸の主人公に母の名を付けたりはしないだろう。また、この作品が一八三二年に Renduel 版に再録されていることを考えると、後年に母との関係が疎遠となっている事実も、決定的

な重大なこととして理解することには疑問が持たれるのである。

シャルル・ノディエを、その存命中は現実の恋人として、死後は終生忘れられぬ魂の恋人として彼に決定的な影響を与えたことで知られるリュシル・フランク (Lucile Franque) に近づけた最初の動機は、彼女が彼の母と同じくジュラの出身であるという事実であったことは、伝記研究家の一致して記している点であり、この二人が同郷の女性であることは、ジュアンも明記して注意を促しているのである。

こうした事実からは、一八〇〇年を越えても尚、シャルルが母にむしる愛情を持ちつづけ、決して、政敵のバンフレットで触発された屈辱感を母への軽蔑と憎しみに転化してはいないということが推察されるのである。

後年、シャルルが母に冷淡であったことは事実が知られている。しかし、その彼の感情を、母の正当でない結婚と、そこから私生児として生まれたことへの屈辱感からもたらされているとのみ考えるのは、以上の諸事実を見れば決して正当な判断とは言えない。

大革命を生きた法曹・ノディエの父

シャルル・ノディエの父アントワヌ・ノディエ (Antoine Nodier) の経歴については、いずれの伝記研究も必要と思われる程度の詳しさで明瞭に述べている。⁽²⁹⁾

アントワヌは、石工の親方として成功した人物 (Joseph Nodier) を父に、父の二人目の妻で、ブルドン (Proudhon) の一族に縁の続く女性 (Anne-Claude Cotton) を母に、父祖代々の土地オルナン (Ornans) で一七三八年に生まれている。高度な教育を受けて、一度は在俗のままオラトリオ会に入り、Lyon、次いで Salins の collège で教壇に立つ身となったが、三十歳近くになって法律の勉強を始め、一七六八年にブザンソン市最高法院 (la cour de parlement de Besançon) の弁護士となる。その後は、財を成した父親が建てた一家の持家に両親とともに一弁護士として地味に暮らしていた。四十歳近くになって彼はシュザンヌ・パリスと識り合い、一七八〇年にシャルルを、四年後にはその妹エリーズを産ませることとなる。

正式に息子として認めるのが遅れたとは言え、アントワ

ヌがシャルルに寄せた父親としての心遣いは愛情に満ちたものであった。その最初の表われは、ジロマニー出身の乳母を付けてやったことである。

父親の愛情を示す証拠の一例としては、ブザンソン市に manuscrits n. 1417 として保管されている一七八九年四月二十四日付のシュザンヌに宛てた手紙を挙げることができる。⁽³¹⁾

シャルルがその最初の教育をルソー (Rousseau) に心酔する父の手でほどこされ、本を取り、拾い読みする年齢に達するや大人同様の精神的成熟を示したこと、八歳の幼児であった頃、モンテーニュ (Montaigne) を抱え歩いてしたことなど、早熟な知性の開花を伝えるエピソードはよく知られており、伝記研究は一致して、彼が父親の影響を強く受けて幼年時代、青年時代を生いたった事実を強調している。

幼いシャルルの相手をしてくれたのは、アントワヌの周囲に集まるおとな達であり、ブザンソンの知識人達であった。恵まれた知的環境の中で、彼がフランスにおける幻想文学の誕生を知らせる「恋する悪魔 (Le Diable amoureux)」の著者であり、やがて神秘思想家として活躍、王党派に与

して処刑されたカゾット (Cazotte) (1719-1792) と出会ったことがあると伝えられている。その印象をノディエは「ジロンド党最後の宴 (Le dernier banquet des girondins)」の補遺 ("Notes historique") の二十八章の中に書き残している。

「多分、八歳か九歳の頃、私はカゾット氏に会ったのを覚えていいる。彼は私の父の友人で、彼が好んで繰り返す話は、まさに子供心にくっきりと焼きつくものであった。老人たちの誰よりも立派で、そのうえ話し好きの人たちの中でもひときわ感じのいい人だった。その話を聞けば、とりわけ愚鈍で怠け者の連中でも、眠るのを忘れてしまうのではないかと思うほど、活きいきとして心をそそる話をしては悦に入っていた。

Je me souviens d'avoir vu M. Cazotte, autant qu'on peut se souvenir de l'âge de huit à neuf ans. Il était l'ami de mon père, et les sujets familiers de sa conversation étaient fort propres à fixer les souvenirs des enfants. Le plus aimable des conteurs comme le plus beau des vieillards, il se complaisait en causeries vives et saisissantes qui auraient fait oublier le sommeil aux naturels

les plus lourds et les plus paresseux.」(Oeuvres complètes de Charles Nodier, tom. VII, pp. 197-198.)

もともと、ジュアンは「シャルルはおそらくカゾットに一度も会ってはいないだろう (Il est probable que Charles n'a jamais vu Cazotte.)」と述べ、この一文をノディエの想像にすぎないとしている。⁽³²⁾ 彼はまたノディエが自分の年齢を偽って書いている例を多数挙げ「万事承知の上で作りごとをでっちあげている (il invente en connaissance de cause)」⁽³³⁾ とも他の箇處で述べている。このような意見は、年齢の記憶違いのみに限らず、もっと多くの例を出し、後者の場合には、証明され得る別の事実の信憑性を確認して並記した上で説得力のあるものとなるであろう。調査研究の余地が残されていると思う。

なぜなら、ノディエの「でっちあげ」好みという、ジュアンと同様の見方は研究の結果発見されたものというよりは、むしろ、ノディエの死後、そのアカデミー・フランセーズの空席を埋めたメリメ (Mérimée) のかなり偏見にとらわれた入会演説から尾を引いているためである。⁽³⁴⁾

こうして父親から学ぶ一方で、シャルルがマチュエ先生の学校に通って初等教育を受けたことも、各伝記は付記し

ている。パンゴは、父の影響よりもむしろこのマチュエ先生の影響を大きく評価しており、それがやがてシャルル・ノディエが進むこととなる。政治と文学との二つの方向を決定している、と見做している(《J》一六頁)。

しかしビエが調べ上げた父親アントワヌの姿を見ると、この革命的情熱に貫かれた父の息子に対する影響は、測り知れないものがあつたであらうと想像されるのである。

一七九〇年七月三十日から八月一日にかけて、ブザンソンではバリの連盟祭(Fête de la Fédération)に出席した市民義勇軍(milice citoyenne)の帰還を祝う祭典がくり広げられた。行進の先頭の一团の中で旗印を掲げる少年がノディエの息子であり、このいたいけな十歳の少年は翌々日、県会議長(Directoire départemental)に旗印を手渡し、代表挨拶をした(《J》一八頁)。

この直後ブザンソンにジャコバンクラブ「憲法友の会(Amis de la Constitution)」が結成され、十一月二十日、市職員の更新に際して、彼らは彼らの擁立する候補者ノディエ弁護士を市長に任命させてしまう。⁽³⁷⁾

ついで彼は一七九一年八月二十八日、ブザンソン管区(ドゥー県)重罪裁判所長官(Président du Tribunal Criminel

du district de Besançon du département du Doubs)に選出される(《J》二〇頁。《P》一六頁)。

すなわち、両親の結婚が認められ、同時にシャルルとエリーズがノディエの子供として正当化された一七九二年九月十二日、父親はブザンソン市の現職の市長であり、新たに選出されたばかりの重罪裁判所の長官であつた。⁽³⁸⁾

フランス大革命とともに、一介の弁護士、アントワヌ・ノディエは、一躍、地方都市の権力の座に着いたのである。この父親が幼い息子に注いだ教育的情熱は、結局、愛国者の育成というただひとつの目的に集約されている。

前述の一七九〇年の連盟祭の後日祭での代表挨拶を始め、一七九一年十二月二十二日、「憲法友の会」のメンバーの前で、愛国的演説をして「青春の王子(Prince de la jeunesse)」と喝采を浴びたこと、一七九二年には、十二歳という異例の幼さで会の正式メンバーとなり、入会演説を行ったこと、これらノディエの少年時代を彩るはなやかなエピソードの影には、彼の政治思想を導き、演説草稿に手を入れ、全ゆる機会をとらえて公民教育を授けようとする父親の姿がある。

「処刑の場に居合せて、待っているうちに彼は気分が悪

くなくなってしまふ。(En attendant, lorsqu'il assiste à une exécution capitale, il se sent mal.)⁽⁴⁰⁾とシェアンは日付も場所も示さず語っているが、シャルルが恐怖政治の暴挙をまのあたりに目撃したこと、その体験が後の彼の作品に様々な形で影響を与えているとされていることは、周知の事実である。しかし、こうした体験も、偶然処刑の場に居合せた一見物人として得たものではなく、父親が、愛国心の高揚を目指す公民教育の一環として、意図的に準備したものであったことを、ビエの調査報告を踏まえて、*△V△* *△J△*を読むとき、はっきりと知ることができる。シャルルの立場は、裁く側、死刑を執行する側に密着していた。ここでアントワヌの当時の職務について*△P△*から知られるところを簡単に述べてみたい(二〇～二九頁)。

アントワヌが長官を務める重罪裁判所は、当初は一般の重罪人を扱い、政治的目的を持つものではなかった。

一方、国民公会(Convention)は一七九三年三月、パリに特別裁判所(Tribunal Spécial)を設置する。簡略な訴訟手続による反革命分子の鎮圧を目的としており、やがて正式に革命裁判所(Tribunal Révolutionnaire)の名称で呼ばれることとなる。

パリと異なり、地方では反革命分子を鎮圧するための特別な裁判所は置かれず、重罪裁判所が同一のスタッフを擁して、従来の裁判を行うかたわら、「反革命(contre-révolutionnaire)」犯には「速やかな手続(procedure accélérée)」を適用して判決を下したのである。地方に於ける革命裁判所の法的な成立の日付は亡命貴族(émigrés)に関する一七九三年三月二十八日の法律によって確定される。この法文によって、法律の保護外の被告は、陪審委員会による事前調査も、判決に関する討論もなく、弁護人も無しで裁判にかけられることとなった。裁判所の仕事はこの場合、死刑を宣告し、二四時間以内にこれを執行させること以外は何も無かった。執行猶予の可能性も上告の可能性もなかった。

ヴァンデ(Vendée)の反乱を契機に、一七九三年九月より、法廷が現地に移動して判決を下し、刑の執行をさせる、という移動裁判のかたちとられる。

最初にこの現地移動式の法廷が開かれた土地はオルナン(Ornans)であった(一七九三年九月八日～二十二日)。

オルナンは、アントワヌの故郷の地でもあり、裁判所のスタッフと共に、彼は十三歳のシャルルをこの出張に同行

させる。シャルルが恐怖政治下の革命裁判の経緯をつぶさに傍聴し、処刑を目撃したのはこの時である。《V》も《J》もこの事件を重視している。⁽⁴¹⁾

オルナン滞在中にアントワヌの主宰する法廷は、十二人に死刑の判決を下し、それぞれ即日ギロチンで処刑してしまった。

「この悲惨な光景は彼の精神に深い印象を残した。

その後数週間、彼は友人達に彼が体験した強烈な興奮を繰り返して語った。

Ces scènes tragiques laissèrent dans son esprit une impression profonde. Pendant les semaines qui suivirent, il fit part fréquemment à ses camarades des émotions violentes qu'il avait éprouvées.⁽⁴²⁾とパンゴは書いている。

法廷は次いでメシュ (Maiche) に移動し、さらにブザンソンに引き揚げて後も同様の裁判と処刑を繰り返す。メシュまでシャルルが同行したかどうかは明らかでない。しかし、例えば一七九三年十一月二十一日十五時、十一人が Place de la Loi (Place actuelle du Huit-Septembre) で処刑された⁽⁴³⁾と記録されているような凄絶な場面にシャルルがま

たしても立ち会ったことは充分あり得ることである。

特異な体験がもたらした精神的ショックを癒すために、父のはからいで、シャルルが暫く家を離れたことは、どの伝記にも記されている。

この時の滞在をジュアンは父親の友人で博学の士ジロ・ド・シャントラン (Giroud de Chantrains) のもとであったとしているのに対して、ロジエもパンゴもストラスブルにウロージュ・シュネデル (Euloge Schneider) を頼って、彼にギリシャ語と愛国思想を学ぶ目的で、ブザンソンから出張で出かけるジャコバン派の同志と道連れで旅立ち、この地に暫く滞在した、と記している。⁽⁴⁴⁾

ジュアンはストラスブル行きに一応触れているものの、事実なのか伝説なのか分らない、と疑問を投げかけている。年譜には取り上げられているが、シャントランとの交渉の後に置かれており、事実の前後関係が乱れている。もっとも一七九四年の項に入れているところは他の伝記と一致している。しかし、ジュアンの場合、オルナンでの体験に全く触れていないので、この時期の記述は不備なものと言わざるを得ない。

恐怖政治を猛然と進めて来たシュネデルは、サン・ジ

エースト (Saint-Just) と対立、遂に処刑されてしまう。シャルルはストラスブールで結局この男に会えなかったに違いない⁽⁴⁵⁾、とパンゴは述べている。

以上の成り行きが明らかにしているのは、父の手になる革命裁判と大量の処刑をまのあたりに目撃するというこの異常な体験が、生々しい、輪郭の定まらぬ衝撃そのものであった状態から、やがて彼の人生に位置を占め、あるいは作品に反映されるまでに熟成するのは、後の問題であり、この事件をきっかけとして彼の生活態度や父の教育方針あるいは父との関係に著しい変化が起こったという形跡は全く認められないということである。ストラスブール行きが、相変らず愛国心の育成を一つの目的として、父によって用意されたことがそれを如実に語っている。

さらに一七九四年七月、祖国の為に死んだ愛国者バラ (Barra) とヴィアラ (Viala) を悼む祭典でシャルルが、この二人に加えてロベスピエール (Robespierre) を讃美する演説をしたことも、同様の経緯の上に置いて理解することができる。

作品に投影されたものとしてシャルル・ノディエの生涯を再構成しようともくろむならば、また作品のテーマや主

要なイメージを通して、その底部の無意識の層に彼の体験を蘇らせようと望むならば、彼の少年時代も、内的必然に従って、ここに描かれるものとは別の一貫した様相のものに再生されるかも知れない。

しかし、現実の混沌のさなかにあって変化は、逆に外部から強いられている。当のシャルルはもとより、父親も、パリから遠いブザンソン市の誰もが、シャルルの演説の前日テルミドール九日 (le 9 thermidor) にロベスピエールが失脚し、処刑台に送られてしまったことを知らなかった。彼らが事実を知ったのは二日後であった⁽⁴⁶⁾。危険を察知した父親は、ブザンソン郊外ノヴィラール (Novillars) の友人シャントランのもとへシャルルを預けてしまう。このいきさつは、いずれの伝記研究も言及している。

テルミドールの事件を境に、アントワヌは権力の座を追われ、不遇の人生が始まる。総裁政府 (Directoire) の出現 (二七九五年十一月) とともに政治生活への復帰は果たされるが、かつての権力の座からは程遠い地位に甘んじることとなる。

父親による愛国者養成教育には終止符が打たれ、シャルルは父の影響から脱して自らの道を取り始める。この彼の

変化は、本質的にはオルナンの体験に根差していると理解すべきかも知れない。然し現象を観察する限り、政權交代に伴う父の力の衰退という外的条件に促されているように見える。

にもかかわらず、シャルルへのアントワヌの心遣いは絶え間なく続けられる。シャルルをEcole Centraleへ入学させたことも、また自分のささやかな地位を最大限利用して司書助手 (bibliothécaire-adjoint) の仕事に就けたことも、その表われととることができる。

しかしEcole Centraleで友を得、彼らとサークルを結成して反ジャコバンに転じていたシャルルと、かつての立場を消極的ながら一貫して保持してきたアントワヌとを見舞った一八〇〇年の事件は、ノディエ父子の身に複雑な波紋を投げかけた。

ジュアンの年譜では一八〇〇年の、事件に関する事項は次のように列記される。

「政治論争・ドゥー県政治・文学報 Bulletin politique et littéraire du Doubs への寄稿。『シャルル・ノディエから市民諸君へ Charles Notier à ses concitoyens』の出版。『鐘撞き人形ジャックメール Jock-

quemard le Carillonneur』の出現」

ブリュメール十八日 (Coup d'Etat du 18 brumaire) (一七九九年十一月九日) の衝突がブザンソンに伝わると、新党派に属する人々と旧党派に属する人々とは、新聞・パンフレットで入り乱れて論陣を張り、激しい政治闘争が展開される。シャルルは新党派に与し、友人達を集めて政治的組織をつくり「ドゥー県政治・文学報」を共同で編集する。政変の後に就任した新知事は一八〇〇年一〇月三日にジャコバン系新聞「トランペット (La Trompette)」を廃刊にし、⁽⁴⁷⁾ 同月二十三日に「政治・文学報」の創刊を許可する。

創刊号の匿名の巻頭論文の署名は誰の目にもシャルルのそれと分るもので、⁽⁴⁸⁾ 彼はその中でブリュメール十八日と新政府に讃美を送る。

「政治・文学報」は以後同様の主張を続け、やがて二人のジャコバン黨員を第一執政 (Premier Consul) に反対する陰謀に加担したと非難する。これに対して印刷されたパンフレットが撒かれ「政治・文学報」の編集者、特にシャルル・ノディエが中傷される。その中ではシャルルの革命的だった過去がほじくり返され、彼の父が恐怖政治の法曹 (magistrat de la Terreur) と非難される。

ジュアンの年譜に「シャルル・ノディエから市民諸君へ」とあるのは、こうしたやりとりの中でシャルルの側から応戦のために発せられたパンフレットをさしている。この中でシャルルは父親の「美德の六〇年 (soixante ans de vertu)」を弁護する⁽⁴⁹⁾。

「鐘撞き人形ジャック・マール」と年譜にあるのは、ジャコバン党員ドルモワ (Dornoy) 等が配ったシャルル攻撃の過激なパンフレットをさしている。そこでは出生の秘密までもが暴きたてられ、前章ですでに述べたように、シャルルは応報の術もなく、深く傷つけられる。

一八〇〇年十二月、彼はパリに向かつて、ブザンソンを出発する。

父、アントワスのシャルルへの庇護は可能な様々な形をとって、こののちも続けられる。しかし以上述べたことで、革命的使命感に燃えた司法官であり、同時に息子を愛した父であるアントワス・ノディエの姿は、個々の伝記研究の不備を相互に補い、批判するなから、浮かび上って来たと思う。

* * *

「出生」「母親」「父親」に焦点をしばったために、此処

ではとり上げることがなかったが、ノヴィラールでのシャントランと送った田園生活、Ecole Centrale のサークル Philadelphia に集う若者たちの交流、活動、これらはいずれもシャルルの十代を彩る貴重な体験であり、いずれ検討を加えたいと思う。

シャルル・ノディエの伝記的研究を含む参考書として、手軽に読めるものがジュアンの「シャルル・ノディエ」一冊であり、これが、既に指摘したように、かなり不備な、省略の多いものである以上、避けがたいことではあるかもしれないが、ノディエに関するほんの簡単な解説文でも周知とは言えぬ事柄が、周知を装って断言されていたり、研究の不完全さは目に余るものがある。

ブザンソンからもパリからも遙かな極東の地にあつて、新発見はもとより、公表された書簡のうちのごく一部分の他は何の資料も目につくことなく、伝記を問題に言うことは、無謀というより殆ど無意味な企てであるかも知れない。

しかし、ノディエに関する知識の乏しさと研究の現状とを念頭に置くならば、かつて出版された複数の伝記研究を

入念に比較、検討し、批判を試みるということが無駄なこととは思われないのである。微力ながらもノディエ研究を目ざす者として、むしろ為さねばならない作業のひとつであると思う。そのために踏みだしたちをやかな一歩として、この小論を認めていただき、いぢぢかでもお役に立てていただくことがあれば、なによりの幸せである。

[注]

- (1) “Sous les dehors de la nonchalance, Nodier cachait un tempérament passionné, une sensibilité toujours à vif et souvent meurtrie. Sa vie intérieure transparaît dans ses fictions, son univers fantastique exprime un romantisme profond.

Apprenons donc à connaître l'homme tel qu'il fut, si nous voulons pénétrer la vraie portée de ses mythes. Nodier fut un grand nerveux, presque un grand malade. Vers sa vingtième année, il se signalait par une exaltation perpétuelle, qu'aggraverent sans doute des expériences d'opium;” (*Le conte fantastique en France de Nodier à Meunassant*, Corti, 1962, p. 122.)

(2) E. Bouvier et P. Jourda, *Guide de l'étudiant en lit-*

érature française, Presse Universitaire, 1950, pp. 6, 9, 47-48.

- (3) Raymond Setbon, “Le dossier Nodier”, in *Romanisme*, n° 15, 1977, Champion, p. 92.

- (4) Hubert Juin, *Charles Nodier*, Seghers, 1970. 本文註 縮号《N》に示す。

- (5) Setbon, article cité, pp. 97-98.

- (6) *Correspondance inédite de Charles Nodier 1796-1844*, par A. Estignard, Monteur Universel, Paris, 1876, Slatkine Reprints, Genève, 1973.

- (7) Nodier, *Contes*, Garnier, 1961.

- (8) M. Henry-Rosier, *La vie de Charles Nodier*, Gallimard, 1931. 本文註 本文中 縮号《P》に示す。

- (9) L. Pingaud, *La jeunesse de Charles Nodier*, Doyiers, 1914. 本文本文中 縮号《P》に示す。

- (10) Maurice Billy, *Un magistrat révolutionnaire: le père de Charles Nodier*, Le Comtois, Besançon. 本文縮号《P》に示す。

- (11) Juin, *op. cit.*

- (12) Bibl. Ville de Besançon.

- (13) “Il y a quelque chose d'étrange dans l'absence de

Suzanne Paris au travers de l'œuvre de son fils."

("N", p. 36.)

- (14) 篠田知和基の「妖精」、『ふんふん』
一九七六年五月号、白水社。

(15) A. Richard Oliver, *Charles Nodier, pilot of Romanticism*, Syracuse University Press, 1964, p. 5.

(16) Docteur en droit sciences juridiques de la faculté de Paris en mars 1928, avocat à la cour d'appel de Besançon depuis décembre 1927, ancien batonnier de l'ordre des avocats, membre de l'académie des sciences, arts et lettres de Besançon.

(17) 現在の地番表にビュラン・ノディエ街十一番地 (n° 11 de la rue Charles Nodier)°

(18) *Jean François les bas-bleus*.

(19) Bibl. Ville de Besançon, GG325.

(20) ユリギエットの「私生児」問題は『D』にも書かれており
(三頁注②)「一七三二年一月三日に生まれた」と記されている°

(21) A. Estignard, *op. cit.*, p. 2.

(22) Jean Larat, *Bibliographie critique des oeuvres de Charles Nodier suivie de documents inédits*, Champion,

1923, pp. 130-131.

(23) "Ne m'accuse pas d'indifférence, si je ne fais pas bien des efforts pour alléger maintenant la situation, mais sois certaine que tu te ressentiras toujours de l'embellissement de la mienne et que je n'aspire, à être mieux qu'à cause de cela." (*Ibid.*, p. 131.)

(24) Billey, *op. cit.*, p. 45.

(25) 前述の「一八〇年」ノディエからの発信した手紙の宛先が「
「マ街」ではなく、Maison Baron, rue du Clos, Besançon
である」という見方、一八一二年に先立って、未亡人は既に「マ街」家の家屋を空け渡していたものと考えられる°

(26) "N", p. 44. "V", p. 71. "J", p. 67. "P", p. 42.

(27) この作品は一九二二年ララにちびつ公表された(『△』
六七頁△△四三頁他)°

Larat, *Charles Nodier. Moi-Même*, Champion, 1922.
(28) 初版は *Les Tristes, Mélanges tirés des tablettes d'un suicide*, Demouville, 1806 に収録°

Oeuvres complètes (Renduel, 1832), Slatkine, III, pp.
289-293, 294-295 Castex, *Contes*, Garnier, pp. 11-14. °
『△』にちびつ°

(29) 以下述べる事実は大体各伝記に記されているが、細部は

《P》に依っている。シャルルの父親に関しては《P》が最も詳細にわたっており、資料も示されている。

(30) 父は一七七六年一月に死亡。

(31) “P”, p. 11.

(32) “N”, p. 37.

(33) その中には、ノディエ自身が、自分の個人的思い出ではない旨を断っており、明らかに体験を取り入れたフィクションと見做すべき「青春の思い出」(Souvenirs de jeunesse)等も含まれていて、とりあげられている例は必ずしも適切なものばかりではない。

(34) “N”, p. 81.

(35) 《J》七頁参照

(36) エイエは Gérard Walter, *Histoire des Jacobins*, p. 63 を参照して「フザンソンに憲法友の会ができるや、ノディエ(父)は早速入会した。このクラブは間もなく、一七九〇年五月二十八日にパリのジャコバンクラブと関係を持つ」としており、「憲法友の会」の設立の時期がパンゴとくちがつてゐる。

(37) “J”, p. 20, “P”, pp. 12-13.

(38) “P”, p. 9, Bibl. Ville de Besançon, GG325, registre

de paroisse de Saint-Marcellin. 一七九一年十一月十三日、市長辭任(《P》一七頁)。

(39) 《P》三四頁参照。

(40) “N”, p. 38.

(41) “V”, pp. 32, 34. “J”, pp. 26-27.

(42) “J”, p. 27.

(43) “P”, p. 31.

(44) “V”, pp. 36-37. “J”, p. 28.

(45) “J”, p. 28.

(46) “P”, p. 36. “J”, p. 32. “V”, pp. 42-43. “N”, p. 39.

(47) 《J》が最も詳細。六五頁。

(48) “N”, p. 44. “V”, p. 70.

(49) “V”, p. 71. “J”, p. 67.